

念仏の深さ

「信心決定して念仏申せ」

六月五日。安野村の佐々木菊次郎さんの念仏の呼吸が絶えました。思えば大正十三年から今日まで、よく聞法を続けて下さいました。村の人々は、誰も彼も佐々木さんを尊い存在として仰いでいました。真の念仏の行者というのは、あんな人のことであらう。お念仏の真価を身を以て示して下さいました。如来の教命、大地の使命を有難くも受取って下さった方でありました。一昨年は長女の静子さん、そして昨年は、おばさんが癌で亡くなられましたが、佐々木さんに劣らぬほどお念仏を喜んで、死の覚悟の中に、最後までみ法に生きて下さいました。夫婦そろって互に感謝しあい、合掌しあい、有難い夫婦相和の道をお念仏の中に成就せられました。

しかし始めからそうした存在であったのではない。御自身の告白によれば、初、大正十三年までは欲をいのちに生きて来られたのであったそうです。それが一度、発心されるや、まことに真剣な聞法精進が続けられました。わかりきるまでは、何ものも顧みず求められました。お念仏が申せるようになってから、よく聞かれました。御法の前を素通りせぬ人でありました。そして御法中心にそれからいよく本気で働かれました。

太田川の河畔に咲く一本の華を失ったことはさびしい気がしますが、「信心決定して念仏申せ。」ということの真実をいよく、明らかに示しつつ、この世を発つて下さいました。こうした多くの希有華に包まれた私は幸であります。

誰も彼も死んでゆく。一人残らず死んでゆく。求めても、求めなくても、拒んでも避けても、人は死んでゆく。科学が進んでも、進まなくても、人は死んでゆく。しみじみとその考えられることであります。わけて皇国忠良の軍隊の方々が、国を守るために散つて下さることを憶念する時、合掌せずにはいられません。念仏申さずにはいられません。朝晩の仏参の時、尊き英霊に向つて合掌することあります。何ともいいようのない感銘がお念仏の中に湧いて来ます。

散つて散らぬものを示してゆく。散つても散らぬ尊いものが、み国にはある。散つてこそ、そこに散らぬものが輝いて来る。その不滅のもの流れたもうみ国に生を享けさせて頂いたらこそ、散つて御奉公が出来るのでありましょう。世尊が諸行無常、諸法無我とお説きになるのは、無常を超えた、唯一絶対の滅びざるものを得させんが為でありました。

信心の智慧を恵まれたものは、ほのかに二つの世界のあることを信知せしめられてきます。滅ぶ世界と、滅ばぬ世界、この世と、あの世がそれであります。この世がどうしようもない苦悩に満ち、顛倒に満ちた世界であることが知られる時、その世の清浄真実、寂静の境の念ぜられることであります。滅びる世界にありつつ、滅ばぬ世界のもの頂いて生きる世界の尊さ、ゆたらかさが、思われることであります。

念仏行者は徹底的に知るべきを知らされます。滅ぶものは滅ぶと知らされ、苦悩は苦悩と知らされ、罪悪は罪悪と知らされ、あてにならぬものは、あてにならぬと知ら

されます。しかるに、かくの如く、一時のゴマ化しに生きることをごとく打ち破られて、この世の真相をありのまゝに知らされても、自暴自棄にもおち入らず、悲観絶望の谷にもおちず、その中に、感謝の生活が成就するのは、滅ばぬものを廻向せられるからであります。

信心決定して念仏申せ、とのみ教の深さを憶念せずにはいられません。

信心決定して念仏申せ。

日々夜々、み法を求め、念仏して、ひそかに念仏の一道をたどらせて頂いている中に、何を見、何を聞いても、ついに心の底からの満足と、よろこびは得られないものであることが、本当に知らされてきたようであります。み法でなければ、心の底からの充大な満足とよろこびは与えられないことは、み法を真に聞いた人だけが知ることです。また、外のことは、酒でも、娯楽でも、趣味でも、深さを持たぬからであります。そして熱中すればするほど、心にいけないか、体に悪いか、どちらかでもあります。み法は、聞けば聞くだけ、体によく、心によく、家によく、国によく、いよいよ人間の世界をほんとうに成就して下さるようであります。

ある街で、無量寿経の有難い講座が開かれていた夜のことです。一方には真面目な青年壮年が集つて永遠の真実教を聴講しております。その周囲では、この超非常時下に、盛に料亭で宴会が開かれてドンチャン騒ぎであります。卑俗低調な歌が出る、聞いていられないような猥褻な談が大声であたりを響く、戦争小唄が歌われる。前講のある間、私は二つの世界の声の中にあつて、深い内省に沈むことでもあります。政治による外からの統制の重圧は、誰に必要なのでありましょうか。

念仏行者は、み法より外に快樂を持たぬ。念仏より外に満足を持たない。興亜の国策にも楽々と副わせて頂けることを感じ入りました。

信心決定して念仏申せ。

子供が私の部屋に来ていました。

「お父さん、よく勉強しますね。そんなに勉強したら、勉強することが無くなりませんかね。」

子供らしい不審であります。そうではない。勉強すればするほど増えてゆく勉強、とても一代はおろか、五代十代かかっても頂けつくせない勉強であることを言つて聞かせたことであります。

無限の法蔵、如来久遠の真証を開けば、一大劫するも尽きないであります。しかも、それはまた、いくら聞いても学んでも南無阿弥陀仏一つに拠つてしまふ、お念仏一つになつて下さる勉強、宗教の深さと有難さのまことにしみじみと思われることでもあります。仰信とは無限の深さに直面した心であります。

無限の法蔵は念仏の胸において開いて下さる。「貧苦」を救わずばのお誓いは、事実中の事実であります。真の中の真であります。